

1 日時

平成28年12月21日(水)

午前11時～午前12時

2 場所

県正庁

3 出席者

秋田県知事 佐竹 敬久

秋田県教育委員会

教育長 米田 進

委員(教育長職務代理者) 岩佐 信宏

委員 伊藤 佐知子

委員 猿田 五知夫

委員 大塚 和歌子

委員 伊勢 昌弘

4 議事

グローバル社会で活躍できる人材の育成について

5 配付資料

資料 グローバル社会で活躍できる人材の育成に関する意見交換資料

開 会

(総務部長)

それでは、ただ今から、平成28年度第1回秋田県総合教育会議を開催いたします。

はじめに、佐竹秋田県知事が御挨拶を申し上げます。

知事挨拶

(知事)

米田教育長はじめ、教育委員の皆様には大変御多忙のところ、この会議に御出席賜りまして誠にありがと

うございます。

また、平素から本県の教育の振興のために皆様にはご尽力を賜っております。心から感謝を申し上げたいと存じます。

昨年度設置いたしました、この総合教育会議、今回で3回目でございます。

教育委員の皆様の御意見を直接伺うことのできる、大変貴重で有益な場でございます。

今日も時間が限られてございますけれども、実りのある議論にしていきたいと思っておりますので、宜しくお願い申し上げます。

さて、全国に先駆けて実施して参りました、少人数学習の取組などによりまして、本県の小・中学生が全国学力・学習状況調査におきまして、常に全国トップレベルを維持していることは周知のとおりでございます。

今後はこの成果の上に立ち、10年先、20年先を見据え、このふるさと秋田の教育を基盤として、地域等と連携したキャリア教育に取り組み、自らの未来を切り開いていくようなたくましい力を伸ばすとともに、世界の様々な分野で活躍することができる人材を多数、この秋田から輩出していく必要があると思っております。

人口減少、少子高齢化という本県の様々な課題に我々も一生懸命対応してございますが、究極には、これからこの秋田を背負う子どもたちの肩にかかるわけでございます。そういうことで、この子どもたちをいかに我々が様々な面で個性を伸ばし、また能力を発揮できるように、この秋田の再生を図っていくかという視点が大変必要ではないかと思っております。

そういうことで、今日また、グローバルなことについての御議論を願うわけでございますけれども、皆様には今後とも様々な面から御尽力を賜りますようお願い申し上げます。

(総務部長)

続きまして、米田教育長から御挨拶をお願いいたします。

教育長挨拶

(米田教育長)

まずもって日頃から知事をはじめ、知事部局の皆様には、教育行政に関しまして、様々な面で御理解、御協力を賜りまして誠に感謝しております。改めて御礼申し上げます。

昨年10月の会議以降、12月に猿田委員が就任され、また、今年はいよいよの前ですが、大塚委員、そして伊勢委員が、委員として新たに教育委員会に加わっていただいております。それぞれ今回が初めてでありますので、どうか宜しく願いいたします。

さて、本日の午後3時からの予定となっておりますが、中央教育審議会の総会が開かれます。文部科学省の旧庁舎の講堂で開かれるのですが、その中の議案の一つである、次期学習指導要領の改訂に向けた最後の審議が行われて、提言をまとめた答申が今日出されることになっております。

その中にたくさんの方が書かれているのですが、なかでも、子どもたちが今現在、グローバル化が進む社会の中で世界のいろいろな人々と向き合っていくための資質・能力を育てていくことが大変重要であるというようなことも述べております。そのために行うべき事はたくさんあるのですが、一例として注目されているものに、平成30年度から小学校における英語、今まで外国語活動になっていたのが、5、6年から3、4年に移って、5、6年の方は教科としての外国語ということになって、そういう形で英語教育が更に拡充していく、というところも注目されるところでございます。それに伴って様々な課題がある訳なのですが、併せて、そういう課題にも対応していかなくてはいけないということでもあります。教育委員会では、各小学校においてはALTや英語の堪能な方が地域にはいらっしゃるしまして、そういう方々の力を借りて、外国語活動の充実をこれまでも図ってきておりますが、これを更にもっと充実させる必要があると。また、中学校や高等学校では、海外の学校との交流、それから、留学などを経験した人からの様々なお話を聞く機会を設けることなどを含めて、子どもたちに国際的な視野と、それからまた同時に、それをもって地域でどうい

うふうにそれをまた活かしていくかという、視点を持たせるように努めてきております。この他にもいろいろな対応策がまた考えられなければいけないものと思っております。

この会議は改めて申し上げるまでもないのですが、知事部局と教育委員会をつなぐ、大変貴重な機会であると考えております。本日は、将来の秋田、また日本を担い、世界で活躍できる人材を、県全体としてどうやって育成していくべきか、ということについて、フランクに意見交換をして有意義な会にしてまいりたいと思っておりますので、どうか宜しく願います。

知事はじめ部局の皆様には改めていろいろな面で、御指導、御協力をお願いいたしまして、私からの挨拶といたします。今日は宜しく願いいたします。

(総務部長)

ありがとうございました。

それでは、議事に入ります。会議の進行は、秋田県総合教育会議運営要綱第3条に基づきまして、知事に議長をお願いいたします。

グローバル社会で活躍できる人材の育成について

(知事)

それでは、以降の議事進行を務めさせていただきます。

次第4の議題でございますが、「グローバル社会で活躍できる人材の育成について」ということでございます。まずは、教育委員会から御説明をお願いします。

(高校教育課長)

「グローバル社会で活躍できる人材の育成」に関する意見交換資料を御覧いただければと思います。

本日の議題となっている「グローバル社会で活躍できる人材の育成」につきましては、「第2期ふるさと秋田元気創造プラン」と「第2期あきたの教育振興に関する基本計画」において、本県の重要な戦略目標の一つとして示されているものでございます。

まず、資料の1のところでございますが、「グローバル化」とは、情報通信技術の進展などによりまして、

人や物、情報の国際的な移動が活性化して、各国が相互に依存し、他国や国際社会の動向を無視できなくなっている現象と捉えることができます。この中で教育分野としては、諸外国との教育交流や、外国人材の受入れ、グローバル化に対応できる人材の養成などが求められているところでございます。

続きまして、「2 教育委員会の取組」でございますが、グローバル社会で必要とされる資質・能力につきまして、英語による発信力、協働的な問題解決の力、ふるさとや異文化に対する理解、と整理をしております。これらの資質・能力につきまして、各学校では、各教科の指導だけではなく、全ての教育活動を通じて、計画的な指導を行っているところでございます。具体的には、協働的な問題解決の力の育成としましては、「秋田の探求型授業」の推進などによる「問い」を発する子どもの育成、英語による発信力の強化としましては、英語によるスピーチやディスカッション等の充実、日本やふるさと秋田の理解の促進としましては、歴史や伝統を重視する活動やふるさとの魅力を発信する機会の充実、異文化に対する理解の促進としましては、異文化の方々や触れ合う活動の充実等の取組を行っているところでございます。

その下が、平成25年度から県教育委員会が取り組んでおります、「あきた発！英語コミュニケーション能力育成事業」についてまとめたものでございます。右下の写真がこの活動の一部ですが、専門高校生による海外企業の研修、教員の指導力向上のための研修、ALT を活用した English Camp の実施など、小学校から高等学校までが一体となった取組を行うことによりまして、秋田の全ての子どもたちが、自らの考えやふるさと秋田の魅力を英語で話すことができることを目指しております。

続きまして、3の①、②は、秋田県の中学3年生と、高校3年生の英語力を示したものであります。全国的な状況としては、今年の4月に文部科学省が都道府県別の状況を公表しましたが、その調査結果では、本県の中学3年生の英検3級以上の取得率は、39.7%で全国1位、高校3年生の準2級以上の取得率は、15.3%で全国9位となっています。また、③、④は

県内の高等教育機関における人的交流の状況でございます。

続きまして、資料の2枚目を御覧いただければと存じます。(2)は、グローバル社会で活躍できる人材の育成に対する県民の意識調査の結果になります。「不十分である」と回答した割合は12.9%、「やや不十分である」と回答した割合は26.6%になっておりまして、グローバル人材の育成に対する、県民の皆様からの期待の大きさがうかがわれるところでございます。

続いて、4は、小学校、中学校、高等学校の国際交流の状況についてまとめたものでございます。小・中学校では、①にあるような学校間の交流のほか、②にありますように市町村単位での派遣事業を行っております。(2)高等学校につきましては、①にあるように平成20年度からソウル高校との交流を行っているほか、右上の②のとおり、海外への修学旅行や、③のような国際交流を実施しております。また、(3)にございますとおり、秋田の教育資産を活用した海外交流促進事業としまして、今年度から、タイとの交流事業を本格化させております。

簡潔ではありますが、資料についての説明は以上でございます。

(知事)

それでは、ただいま説明がありましたけれども、本日のテーマについて、各委員から御感想あるいは御意見、御提言などをお伺いできれば幸いです。

はじめに、岩佐委員からお願いします。

(岩佐委員)

岩佐でございます。宜しくお願いたします。

先日、秋田南高校を視察させていただく機会がありました。資料にもありますけれども、秋田南高校は文部科学省のスーパーグローバルハイスクール、SGHに認定されております。これは、将来国際的に活躍できるグローバルリーダーの育成を目的としております。このときは急だったものですから、私一人で行かせてもらいました。一つ目は秋田南高校のSGHカンファレンス、これは秋田市の文化会館で行ったのですけれ

ども、この研究会でのプレゼンテーションのためのリハーサルを見学させていただきました。研究のテーマは、「地球の食糧問題に挑む」という非常に大きいテーマでございました。2年生の生徒が6人程のグループを作って、それぞれのグループで、先程申しましたテーマで、地球の食糧問題に挑む、これに沿って課題を設定し、その解決策を探求し、これを英語でプレゼンテーションするというプログラムでございました。与えられたテーマについてグループで検討し、それを英語で発表する、それは小さい頃から今まで学んだ全ての知力を総動員して取り組む、そんなプログラムだと思いました。見ていて、生徒たちが自分たちの今までの枠を超えて何かブレイクスルーしていくような、そんな瞬間を目撃したような感じがいたしました。このような学習方法を日常的に行い、そのノウハウを蓄積することができれば、これからの秋田のグローバル社会で活躍できる人材、これを育成することができるのではないかと、非常に心強く感じてまいりました。その日は日程の都合がとれず、リハーサルしか見ることができなかったのですが、後日、プレゼンテーションの指導を担当していた方からお話をお伺いしたのですが、文化会館で行った本番では、さらにリバイズされた仕上がりになっていたということを知り、次の機会にまた是非視察してみたいと思いました。

先程、高校教育課長から資料について説明がございましたけれども、1枚目の資料の左側の三角の図ですけれども、こちらの方の三角の図で示したとおり、グローバル社会で活躍できる人材に必要なものは、例えば、私どもの世代が英語で学んできた、リーダーとかグラマーであるとか、そういった英語の学力というよりは、英語での自己表現力、そして、発信力が問われる時代になってきていると思います。ここでは、英語というのは目的ではなくて、一つのツールであると思っています。単に英語ができるということではなくて、人文科学や社会科学、自然科学に関する、バランスのとれた基礎的な学力であると思います。特に、日本やふるさと秋田の産業や自然、歴史、これらに関して、自分の言葉で語るができる、それぐらいの

深い理解、そして、併せて豊かな感性と道徳心、そういうベースがないと、三角の図でいうと一番下の部分になりますが、そういったベースがないと、いくら学力や発信力があっても薄っぺらなものになってしまうのではないかなと感じております。

グローバル社会で活躍する人材とは、こういった豊かな知識と教養に支えられた、考えや想いを仲間と共有して、それを発信できる人材、先程述べた秋田南高校のSGHへの取組はまさに、この方向性と合致しているのではないかなというふうに思っております。しかし、高校の授業というものを考えてみれば、現状の大学入試で要求されるものは、どちらかという従来日本の教育に基づいた、いわゆる学力というものが、まだまだ大きなウェイトを占めているというふうに思っております。小学校、中学校、高校での教育と、大学で必要な学生像と、その入試というか、選抜方法の整合性が今まで以上に、必要になってくるのではないかと感じております。

先程の秋田南高校のプロジェクトはまさしく、秋田の探求型授業、すなわち、アクティブ・ラーニングの延長にあるものと思っています。もしかしら、秋田の探求型授業というものは、大学に入ることよりも、大学に入ってから、また、その先の社会に出てから、その成果を十分に発揮できるメソッドではないかなと思っています。

グローバル人材というと、すぐ思い浮かぶことの一つに、海外留学が挙げられると思います。私も30年近く前になりますけれども、ロータリークラブという団体のスポンサーシップで、社会人を対象とした短期の交換留学プログラムがありまして、アメリカに2カ月ほど派遣されて行くことになりました。そのときの留学は学校に通うのではなくて、毎日様々な企業とか病院や役所、軍隊にも行きました。議会や大使館にも訪問して、様々なレクチャーを受けて、スピーチやディスカッションなどを行いました。たまたま全く偶然なのですが、米田教育長もこの同じロータリーの社会人向けプログラムで、アメリカに行ったと聞いております。私が行った数年前だと聞いておりました。今日の資料にも、大学等の高等教育機関における留学

事情が記載されていたと思いますけれども、今日は私から、高校生の海外留学事情についてお話をさせていただきたいと思います。

高校生の海外留学は、金銭的にも、それ以外にも、かなり本人や家族に大きな負担がかかるものだと思います。私もロータリークラブの会員として、交換留学を担当していたことがあったものですから、実際にどれぐらいかかるのだろうかと思って調べてみたことがありました。仮に、そのロータリーの交換留学生として行った場合には、航空運賃とか諸費用あるいは授業料などで、年間60万円ぐらいかかります。その他に、ロータリークラブが受け入れるための費用として月10万円、年間120万円ぐらいかかるようです。お金はなんとかなるかもしれませんが、大変なのはホストファミリーといいますが、ホームステイ先を探すのが非常に大変で、何カ月も、3カ月とか1年とか、長期に渡って子どもを預かるというのは大変な作業でございます。

受入先を探すのは非常に大変な事であると思っています。こういう民間団体の支援を受けることができればいいのですが、これが私費留学ですと、丸々この分、200万近くのお金が自己負担ということになっております。以前は、県の方でも長期留学を支援する制度がございました。その時には、ピーク時には42名ぐらい、年間で高校生が派遣されております。その制度が終わった後には、これが7名、少ないときには4名くらいまで激減しております。この辺りも将来のグローバルのことを考えれば、もうちょっとなんとかならないのかなと感じておりました。

また、県内の交換留学生を受け入れる高校にも、大変温度差があるように感じます。温度差というよりは、ノウハウの差と申しますか、毎年のように留学生を受け入れている高校は、そのためのノウハウが蓄積されて、日本語が得意じゃない人への授業の対応などでもできるのですけれども、必ずしもそうでない高校もあるというふうに聞いております。多くの高校で、そういった留学生とか帰国子女とか、受け入れるような配慮が、今以上に必要になって来るのではないかなと思っています。私の子どもも今、高校生なのですけれども、

考えてみれば、幼稚園ぐらいから、同級生には常に親の片方が海外出身の子なども多くおりました。と考えれば、小さい子ほど、ポードレスの意識でいるのかなと感じております。現在、大学生の留学希望者はかなり減ってきて、内向きになってきていると聞いたことがあります。県としてできることは限られているかもしれませんが、とにかく、そういったことに背中を押す施策ができればなと思っています。

長くなりましたが、以上でございます。

(知事)

どうもありがとうございました。

次に伊藤委員をお願いします。

(伊藤委員)

伊藤と申します。よろしく申し上げます。

私の頃の秋田県の教育ですと、英語を学ぶと東京に出て行ってしまうということで、保護者の多くが英語の先生になる訳でなければ、英語は覚えなくてもいいと子どもに教えるような風潮がありました。実際そういう教育を受けて、私は今、秋田大学で教員をしているのですけれども、英語で論文を書いて、海外の雑誌に投稿したり、英語でEmailを送ったり年に何回か海外の学会に行つて、お話しする機会があるのですけれども、非常に英語が苦手で苦労しております。もっとあの時に英語を学べば良かったと後悔しております。その後にも、大学の仕事で10カ月在外研究という留学をしました。そのような機会は秋田ではなかなかのことですから、私はとても恵まれていたと思います。

最近、私の身近で海外の方と交流している方の話を聞きました。一人は、職場の企業の命令で中国に赴任した方で、中国で労働者の方を管理していたそうです。また、もう一人は、秋田の建築現場で中国人労働者の方と一緒に仕事をされている方でした。秋田におけるグローバル化を考えた場合、留学などで出て行くということもあるのですけれども、今後少子化で、介護とか建築とか、そういった分野で海外の外国人労働者の方が、今後秋田に入ってくる可能性もあるのかなと感じ、これに対応していくことが必要だと思います。子

どもたち以上に、大人全体として、海外の人たちをもっと受け入れていくような姿勢があれば、もっともっとグローバル化社会が進んでいくのかなと思いました。幸いにして日本に入ってくる労働者の方々は、比較的審査を受けて入ってくる方が多いので、そういった意味では受け入れやすいのではないかと思います。

また、先程高校教育課長から説明がありました、秋田県の英語教育につきましては、小・中・高と非常に素晴らしい取組がされてきていて、成果も少しずつ出てきていると思います。先程申しましたように、グローバル化を実践するとすると、秋田にはなかなか機会がないものですから、いろいろな分野で、日本に入ってきている労働者の方とか海外の方々とも、一緒に仕事をしていけるような事も、一つの機会かと思えます。

そして、小学校でも英語教育が始まりましたので、教育現場ではマンパワーが不足すると思います。今後、更に充実を図っていただきたいと思います。

以上です。

(知事)

ありがとうございました。

次に猿田委員をお願いします。

(猿田委員)

猿田と申します。委員を拝命して間もなく1年になります。よろしく申し上げます。

私は、現在までのそれぞれの取組を拡充していくことだと思いますけれども、地域を越えて、国を超えて、仕事をし、生きていくために身に付けるべき力、求められる資質を、特に3点挙げるとすれば、第一に能動的に物事を捉え、考え、行動できる力、二つ目は相手の考えや意見を尊重しながら、自分の考え、主張を他者にしっかりと伝えるコミュニケーション能力、三つ目に、激しい競争の中で勝ち抜いていくといっても、手段を選ばず他の足を引っ張ったり、偽ったりしてはならない訳でありまして、あくまで、公明正大に努力をしていくというような倫理観、道徳性、規範意識、こう思います。このような資質は、達成度をなかなか評価しづらい訳でありますけれども、本県が長年に

渡って取り組み、成果を上げている、授業のあり方であるとか、ふるさと教育、あるいはキャリア教育などを各教育課程で更に総掛かりで進めて、本当の力、実力を育てていくことだと思います。

次に、本日の資料に取組として載っていないことで恐れ入りますけれども、専門学科を持つ高校の職業教育、産業教育についてであります。本県の産業教育はレベルが高いということでもありますけれども、ここでも、グローバル社会で活躍できる有為な人材を、一人でも多く輩出するような、専門高校の教育環境の充実を更に図っていただきたいと思えます。航空機産業、エネルギー産業などの分野で活躍できる人材育成については、それぞれ準備が進められているところでありますけれども、この高校で是非学びたいと思わせるような、特色のある学校づくりを、特化して進めていくべきであると思えます。そういう意味では、能代地区で県内初の工業、農業の統合校が開校予定でありますけれども、工業、農業、科学分野において、次の世代、時代に求められる技術や技能の専門性を深めていきたいと、意欲を持たせるような教育活動ができるような学校になればと、期待をしております。ICT、IoTなど急速に科学技術が進んでいく中で、これに即応した環境を整えていくというのは、なかなか難しいことだと思いますけれども、ただ一方で、随分古い年季の入った機械や機材を使っている学校があります。学習、実習設備の整備、あるいは指導者の採用、育成などに対して、一層の御理解をいただき、格段の御配慮をお願いしたいと思います。

また、来年10月に開催されます、全国産業教育フェアでありますけれども、私とその準備委員会の会長を仰せつかっております。日頃の取組を県内外に発信する、絶好の機会にできればと思っております。主役は専門高校、特別支援学校で学ぶ生徒でありますけれども、小中学生、大学生にも是非参加をしてもらいたいと思えますし、とりわけ企業の皆さんにも積極的に関わっていただくような大会にしたいと思っております。

県内企業もいよいよ各分野で、グローバルな戦いを求められておりますけれども、同時にチャンスも広

がってくると思います。地域産業を担う人材を育成していくと同時に、世界に出て活躍していくような人材を連携して育てていくのが、大事であると思います。

私からは以上です。

(知事)

ありがとうございます。

次に大塚委員をお願いします。

(大塚委員)

大塚でございます。どうぞよろしくをお願いします。

グローバル社会で活躍できる人材の育成ということですが、私は岩手出身なのですが、30年も前になりますが、高校で海外に修学旅行に行く学校は1校ぐらいだったと思います。私は田舎の高校におりましたので、高校生で海外に行くなんてすごいなというか、すごく珍しいことだったと思います。でも、この資料をみますと、派遣事業や各地域、各学校の国際交流の機会が拡大して、子どもたちに機会が多く与えられているということが本当に素晴らしいことだし、どんどんそういうふうになっていってくれたら、きっと秋田の子どもたちがいつか世界で活躍できるような形ができると思って、本当にありがたいことだなと思っています。

それから先程教育長からも話がありましたように、平成30年度に英語教育が先行実施により教科として5年生、6年生から、3年生、4年生にも入ることになりました。それまであと2年しかありません。そのときのことを考えて今思うことがあります。小学校の場合は、基本担任が教えるということになると思います。現在、先生方の仕事量は決して少なくないと思います。その中で私が見ていると、小学校の先生方は空き時間がなく、中学校の先生方は午後になるとクラブ活動があるので、自分の放課後の時間がないのではないかと思います。いろいろなことをする中で、先生方の心に余裕がなくなって、多くの子どもたちに心をかけてあげる余裕がなくなるといいなと思います。先生方は基本、資質は十分に備えた方たちと認識しております。その中で、まじめなのでやることはやら

きやという感じで、仕事をどんどんこなしていくと思うのですが、2年後には、カリキュラムが増えるとなると、一体どうなるのでしょうか。子どもを見つめるまなざしを増やすということの一つ、それから、それに伴って新教科に対するシステムの構築化、それから、特に若い先生方へのしっかりとしたバックアップというのが必要ではないかなと思います。子どものことを見つめるまなざしを増やすということは、私も一父兄なのですが、いじめ問題の解決につながっていくのではないかなと思います。またそこでただ数を増やせばいいというものではなくて、それに対しては予算とかそういうことも関わってくると思うので、大変なことだと思います。もし将来のことを考えて、教育にお金をかけることができれば、その歩みはゆっくりでも、もしかしてあまり目に見えないのかもしれないませんが、確実に社会は良くなっていくのではないかと思います。人間性の涵養というか、この資料の中にも「異文化に対する理解の促進」というところに、「自他を尊重する精神の涵養」というのがあり、これはすごいな、この言葉はすごく大切だなと思いました。その中で道徳とか、倫理とか、心の教育の根底部分を確かにすることで、世界に誇れる日本人を、心豊かな秋田人を育てていけるのではないかなと思います。そしてその中で、英語はとても大切なツールになると思います。先程も岩佐委員が言いましたけれども、英語はツールの一つであると思います。相手を尊重し、相手の事が分かるということは、世界を知る、日本を知る、自分を知るということになると思います。また相手を尊重するということが、将来的な目標としてはすごく遠いことなのだと思いますけれども、世界の平和につながるのではないかなと思います。

最後に、まだ私は委員になって1カ月半しかたっていないけれども、いろいろな人が一生懸命にやっていて、ここは秋田をよくしようという人たちの集まりなのだなと思いました。その人の素晴らしさに日々感激することばかりです。このような機会を与えられたということは、私にとっては大きな財産だと思います。人と人とのつながりということ、これからも大事にしていきたいと思っています。

どうぞよろしくをお願いします。

(知事)

最後に伊勢委員をお願いします。

(伊勢委員)

11月1日付けで委員になりました、伊勢と申します。よろしくをお願いします。

本日のペーパーでは、グローバル社会で活躍できる人材の育成ということで、2番目で教育委員会の取組として、協働的な問題解決の力の育成など4点が挙げられていますけど、これは大変素晴らしい着眼点だと思います。私は弁護士という仕事をやっているのですが、外国人の犯罪者の弁護をしたことがあります。その中で印象に残っている体験があったのですが、イラン人が覚醒剤所持で逮捕された事件で、郵便局に局留めで荷物が届いてそれを東京に住んでいたイラン人の方が取りに来て、中身が覚醒剤だったので逮捕されたのです。私が中央署に面会に行き、彼は英語ができる、私も英語ができるかもしれないけれど、ノートに書いたりしながら話を聞いて、最初に、あなたには黙秘権があるので、言いたくないことは言わなくていいです、という話をしたのですが、それがなかなか通じないのです。いろいろ話をしている中で、自分はイスラム教徒でアラーの神様の前と言わないなどということは許されない、心の中にあることは全部話さなければいけないのです、と言いついて、そんなものなのかなと。その割に話はするのだけれども、話している内容はほとんど嘘ばかりという感じで、そういう意味で、アラーの神の前と言わないことは許されないと言いがなら、話をしている内容は中東の商人といいますか、したたかな感じがしたのですけれども、そういう経験があって、この異文化に対する理解というものは非常に大事なものだ。それから、これも秋田が誇るべきことだと思いますけれど、自分の頭で考える教育、これはやっぱりグローバルな人材を育成するためにもそのバックボーンになる大変重要なことで、これはどんどん進めるべきだ。それから、日本やふるさと秋田の理解の促進、これも中身が薄っぺらでは

いくら英語をしゃべっても通用しないだろう、ということの意味があると思うのですけれども、そこで一つ県の方に注文という訳ではないですけれども、秋田の理解の促進というところで、やっぱり我々自身、秋田のいろいろな伝統行事だとか、そういうものについてどこまできちんと理解しているものか、というところが、ちょっと足りないのではないかなと。そのあたり、学校でも丁寧に教えてもらえればいいなと思っています。

それから、英語による発信力の強化ですけれども、ここはやっぱり残念ながらまだまだ足りないのかなと。例えば、私自身であれば、学校の成績は良かったのだけれども、いざ、ちゃんとしゃべれたり、聞いたりできるかというところ、そこは非常に弱いのではないかなと。ヒアリングなんかはあまりできないし、特に発音の方も、例えばINGの発音というのなかなかうまくできないとか、そういうところで苦勞していますので、英語による発信力の強化においては、英語のヒアリングとスピーキングは、今まで以上に力を入れていただきたいと思います。それから今日の題材からは外れるかもしれませんが、今日の題材というのは、グローバル社会で活躍できる人材をどんどん伸ばしましょうということで、できる人をどんどん伸ばしていこうという発想だと思いますけれども、私はできる人だけでなく、普通に秋田に住む人が英語で発信する力、日常生活において英語を使いこなせるようにすることが、非常に大事なことだ。と思います。教育委員になったときに、平成25年3月に秋田県教育員会で出した、秋田発！英語コミュニケーション能力育成事業という冊子をいただきまして、この中には、秋田の普通の人々が社会生活の様々な場面において、英語をコミュニケーションのツールとすることを伸ばしていく、ということが書いてありますけれども、そこが非常に大事なことかなと思います。また、この冊子の中には外部の検定試験や合格率といった数値的な目標よりも、実際に英語を日常生活において話せることが大事で、その力を伸ばしていくべきだという記載もありますけれども、まさにそうじゃないかなと思っています。ですから、優秀な人、グローバル人材を伸ばしていくとい

うことは、これはもちろんどんどんやっていただく必要があると思いますけれど、一方では普通の秋田の人が、日常会話程度の英語をみんなが躊躇無く話せるようにすると、そういう教育にも力を入れていただきたいと思っております。

以上です。

(知事)

ありがとうございました。

今、いろいろと御意見、後提言等をお伺いいたしましたが、教育長から一つ、今の意見も踏まえてお願いします。

(米田教育長)

今、5人の委員の方からそれぞれ御意見を出していただきました。改めてこの資料の1枚目の2番、県教委の取組で、グローバル社会で活躍できる人材を育成するために4つ、枠で囲ったものを出してありますが、まさにこのとおりであって、これをいかにバランスよく、そしてそれぞれしっかり育成していくかというのが、ポイントになると改めて感じております。

グローバル化に関しては、文字で文部科学省の方で定義しておりますが、我々、グローバル化、しょっちゅう使っておりますが、そもそもグローブの元の意味は、地球儀とか地球で、球であります。元々そういう意味がある。今、もうあまり使わなくなりましたが、インターナショナルライゼーション、インターナショナルというのは、地球というともう一つ、アースというのがあります。アースというのは、いわば15世紀の大航海時代あたりからイメージしてもらおうと分かるのですが、人々がさらに未知の国を求めて、フラットなところをどんどん移動して行って、新たな国がないか、新たな地域がないかというようなことで、地球の姿を平面を歩いて確かめようとした。グローブは宇宙時代で、宇宙から地球をみて、まさに地球はグローブ、球であるということが改めて分かった。そういうことで、今あまり、インターナショナルという言葉は使わなくなりました。この関係の話をするときにいつも引用するのが、2010年の1月1日のある新聞の新春対談で、

毛利衛さんと橋本五郎さんが対談したのを覚えておるのですが、毛利衛さんがこういうことを話しています。

「地図で見ると、欧州の地図であれば日本が端っこにあって、ヨーロッパが中心である。だから、日本はファーイースト、極東にあるのですが、また、オーストラリアの人は下の方にあって目立たないと怒っているかもしれない。でも私は、2回宇宙に行きましたが、宇宙からみた地球は美しい球なのです。球だから、そこにフラットな場面で、どこが中心だとか、円の場面でどこが中心だとか、という感覚ではなくて、まさに一体的な感じでものを見ていますので、結局、そこで見ると、中心はどこだという感覚はあまりない」と言っています。まさに今、そういう時代になっているのだと思っています。たまたま私も英語を教えておったのですが、今から40年ぐらい前ですけれども、英語がこんなに世界の共通語になって、重要なコミュニケーションのツールになる、道具になるとは実は思っていませんでした。もっと他の言語がいろいろ出てきて、場合によっては中国語、中国語は今話している人が一番多いですけれども、もっと他の言語が出てくるかなと思ったら、結果的に英語がこういうふうな状態になってきました。今、英語は、皆さんもお話してはいますが、全てコミュニケーションの道具であるという認識を持つということが、やっぱり大事であると思います。この人材の育成の中で、さっきも出てきました、自分の地域のことを知ってそれを発信するということ、それから一方で、いろいろな国の文化、歴史、そういうふうなものをしっかり理解しようとする、そしてそれを受け入れるということ、異文化理解、そして自己文化の理解、発信、そしてそれを繋ぐツールとしての英語があると。それから、これからはどんどん、いろいろな国の人とさまざまな仕事を一緒にやっていかなきゃいけないという時代であるということから、コラボレーションしながら問題を解決していくということ、これがこの4つの枠の中に入っていると考えると、教育委員会では取り組んでいるところであります。

私自身は18歳の受験まで、実はネイティブスピーカーと話したことはありませんでした。東京に行って受験の時にホテルに行って初めて、外国の方と話をし

まして、その時に使ったのが基本的に受験英語のいろいろな例文ですね、そこから入りましたけれども、その後、大学の学生の時に、バックパッキングみたいな感じで、ソ連からずっと東欧を回ってヨーロッパ等をずっと行ったり、ギリシャを含め随分回ってきました。その時の体験は、人間その気になればどこでも生きられるのだなというふうな自信でした。

それから、岩佐委員がお話になった、ロータリーにもお世話になって、グループスタディエクスチェンジ、GSEのチームのメンバーとしてアメリカに行きました。さっきの岩佐さんの話のように、いろんなところを訪問して、そしてかなりの回数になりましたがスピーチする機会をいただきました。30分、40分も話すという機会が結構ありましたが、それがまさに、実地でのトレーニングになったという記憶があります。そういうことで、実際に外に出て、自分で体験して身に付けるというふうなことが、非常に大事だというのが私自身分かっているつもりです。

一方、今この時代になって子どもたちはとにかく、秋田にいてもいろいろな国の人と出会える。もちろん、出て行けばもっと広い体験、もっと貴重な体験ができるのですが、英語そのものを実際の道具として使える場面が、今の子どもたちには多く与えられているということで、大変恵まれているというふうに私は思っています。そういう中でお互い理解しあうことの難しさということも、逆に感じてきているものではないかなと思います。

一つだけお話したいのは、グローバル化時代におけるコミュニケーション能力、全部この4つの枠の中にあるコミュニケーションに関わっていますけれども、コミュニケーション能力については、私はこれはそのとおりだなと思うことを紹介して話を終わります。平成23年、5年前の8月の下旬ですが、文部科学省の有識者会議の報告の中で、「子どもたちのコミュニケーション能力を育むために」という中で、コミュニケーション能力を定義しております。この定義に関してどうということが書いてあるかといいますと、「いろいろな価値観や背景を持つ人々による集団において、相互関係を深めて共感しながら人間関係やチームワークを形

成して、正解のない課題や経験したことのない問題について、対話をして、情報を共有して、自らまた深く考えて、相互に考えを伝え深め合いつつ、合意形成・課題解決する能力」であります。いろいろな価値観、背景をもつ人々がいる中で、最終的にいろいろな話し合いをして、最後、合意形成をいかに図るか、そして課題の解決にいかに向かっていくか、というところが特にこれからの時代に必要なものであると。それは日本語であれ英語であれみんな同じだと思います。そういう面で、日本にいても、我々どういう職場にいてもそうなのですが、最終的にいろいろな課題について、いかにお互いに知恵を出して、合意形成を図るか、そして課題をクリアしていくかということ、とにかく基本にして、そのための力をなんとか子どもたちにも付けさせていきたいなと思っているところです。

(知事)

ありがとうございました。

いろいろとお話をお聞きしまして、我々も教育委員会と知事部局で様々な御提言について反復しまして、具体的に政策等に反映するものについて、今後検討を進めることにします。

私は海外にしょっちゅう行っていますけれども、発展途上国の場合、語学を学ぶことは自分を守ること、完全に安全保障ですね。なぜかというと、日本と比べてそういう発展途上国は、英語であっても日本語であっても、外国語を話す機会というのはもう普通なのです。例えば、タイに行くと日本の企業や欧米の企業がたくさん来ていますので、日本の企業に勤める人は日本語をできなきゃいけない。欧米の場合は英語とかドイツ語ですが、企業間でのやりとりはやっぱり英語になります。ですから、生きるために必要ということで普通の人が英語を話しています。その点、日本にはあまり外国の企業というのはありません。あっても日本人が全部やっていますので、日本の産業社会というのは、実は外国語が必要のない社会なのです。ところが、あっちに行きますと、母国語は関係なくて、海外の企業と結び付いて、いろいろな他国言語を必要とします。そういうことで、例えば、英語を勉強して

ある程度能力があっても、実社会で、秋田で英語を使うという場面がないのです。私の娘がアメリカに留学して、英語である程度話せるようになりましたけれども、しばらくそこから離れて、今度、海外とのやりとりのある職に就きましたが、しばらくぶり、かなり忘れしまって、今、また少し勉強しながらやっていますけれども、やっぱり秋田にいと、そういう機会がほとんどないのですね。

もう一つ、学校の中では、大学レベル、特に理工系。例えば、私の出た東北大学の精密工学科の航空工学専攻、これは全部英語です。なぜかという、全て説明書から図面から全部英語ですから。航空工学の分野は英語しか使ってはならないのです。日本語に直すと意味が違って来る。そういうことで、今、由利に航空機産業が展開していますので、由利工業高校の英語力を強くしようと取り組んでいます、これは企業からの要望でもあります。当然、高校生であっても、現場に出れば全部図面は英語ですから、そういう時代だということで、秋田の中で英語を普通にしゃべれる、留学生との交流の場だとか、あるいは、企業にたくさん外国人が来ているときに交流の場を設けるだとか、そういうことも必要なのかなと感じております。

また、英語教育について、海外の場合、例えば、ロシアは、小学校から英語教育を全部にやるのではなくて、英語の科、中国語の科に、小学校から分けています。小学校で共通に学ぶものの他に、自分は英語を学ぶ、自分は中国語、自分はなんとか語、これは徹底して、彼ら方式で小学校5、6年からやっています。あれでやると、小学校の6年生で普通にしゃべれるのです。英語をやるのではなくて、語学教育でいろいろな国の言葉を専攻している。そこに行っている小学生に、なんであなたは日本語を今からやるのと聞くと、英語は共通で学ぶものなので、英語プラスさらに日本語を学ぶのだと。私は将来、日本の貿易の仕事をしたい。あるいは、将来中国との仕事したいので中国語をやっていると答えが返ってきます。完全に将来までを見据えて、小学校のときから職業の選考といいますが、職業の狭い専攻ではなくて、その語学が活きる職を視野に入れています。全ての小学校がそう

ではないですが、幾つかの小学校で行われています。そういう意味でこれも国家戦略であると思います。完全に語学を武器とした戦略で教育が成り立っていて、いろいろなやり方があるのだなと思っています。

あと私が前からとにかく、秋田は数十年後に、日本語が第一秋田語、秋田弁が第二秋田語、英語が第三秋田語ということで、秋田に行ったら、おばあちゃんからおじいちゃん方、子どもも全部英語を話す。これを企業誘致の説明会に行き話したら、それが一番いいとのことでした。もし、秋田でほとんどの人が、片言でも英語を話せば、それは最高の地方創生である。これは観光にしても、外資系の企業誘致にしても、貿易にしても、全部なのです。ですから、そういう意味で少しずつ成果が上がっておりますけれども、教育委員会にはこれからも頑張してほしいと思います。我々の時代はもう無理ですけれども、これから育つ世代には、年を重ねていって数十年後にはみんなが英語を話すことができる。どこかで聞いたのは、孫が英語を一生懸命やっているということで、どこかの町で、おじいちゃん、おばあちゃんが、コミュニティセンターでやっている英語教室で英語を学んでいるという話を聞きましたが、なるほどと思いました。孫が英語をやると、おじいちゃん、おばあちゃんに英語で話します。すると、おじいちゃん、おばあちゃんの方が、時間の余裕もありますし、第一線を過ぎて勤めを終えたそういう人たちが、英語を話せるようになって、観光だとかボランティアに携わるようになれば、学校での英語教育も含めて社会全般が英語になじんで、話す機会が多くなって、最終的には全体のレベルを上げることにつながるのかなと感じてございます。

ということで、時間もちょうどであります。

いろいろな面で、このグローバル人材、いずれ秋田の地方創生については、秋田の県境を超えて、さらに国境を越えて、先進国でも発展途上国でも、そういった国々との交流をどうプラスに活かしていくかということが、それぞれの国家戦略があって難しい面もございますけれども、これが地域のこれからの前進につながるということで、希望を持って、特に語学教育はやっていかなければならないと思います。そういうことで

一つ皆様にも御協力を賜りまして、今日の会議は終わりにさせていただきます。ありがとうございました。

閉 会

(総務部長)

それでは、これで平成 28年度第 1 回総合教育会議を閉会いたします。皆様どうもありがとうございました。

(一同)

どうもありがとうございました。